

目的 小児の体温は変温性であり、体温調節機能は発育成長するといわれているが、現代のように着衣や機器設備などの生活環境の変化が、永い間に日本人が体得してきた温熱適応能力を消失させるのではないかという危惧が考えられる。そこで、母親に委ねられてしまうことが多い乳幼児の生活環境の実態を明らかにする調査研究を行った。

方法 調査内容は、(1) 4回の指定時刻についての滞在室室温、乳幼児の体温(夏のみ)、暖冷房使用状況、母子の着衣状況、生活行動、温冷感など。(2) 母子の身体状態、健康状態、居住環境、着衣の選択などに対する考え方など。以上についてのアンケート調査票と棒状温度計(±1℃許容誤差)を郵送により、配布回収した。調査対象は、関東地方に居住する生後6ヶ月～3歳までの乳幼児およびその母親とし、夏期と冬期<sup>1)</sup>に行った。

結果 室温の平均値は28.7℃であり、全体の80%が26℃～31℃の範囲にあった。冷房の使用率は50%で、そのうちエアコン使用が60%、次いで扇風機が25%と高かった。母親の着用している衣服のclo値は、平均で0.35cloと推定された。乳幼児の衣服数は2～3であった。乳幼児の体温の平均値は36.5℃であり、36.2℃～37℃の範囲に全体の90%があった。  
文献1)都築和代：住宅における乳幼児の温熱環境に関する調査研究、建築大会梗概集、環境工学、1379-1380、1993など